

頭

彰

会

便

りA

NO. 4

昭和62年(1987)3月24日  
編集・発行  
津田左右吉博士顕彰会  
広報委員会  
(美濃加茂市下米田町則光)  
(TEL 0574-25-2714)

# 著述千秋功未了

会長 尾 関 公 見

津田博士顕彰会が創立されて二年を経過し、その事業として各位のご熱意と市からの格別のご配慮によって、新築なった図書館前に博士の偉大な業績とその努力を象徴する記念碑が建てられました。制作は市内在住の新進彫刻家・佐光庸行氏のユニークな着想と燃ゆる情熱によって日々ノミ打ちが進められ、このたび除幕のはこびとなりました。学界の至宝とも仰がれる博士の数多い著作も第一歩はたゆみない読書から始まっていると思えます。

のため白鳥庫吉博士の全蔵書を読破されるなど、寝食を忘れて研究に没頭され、後日「自分ながらよくあれだけ勉強をした」と述懐されています。こうした努力は終生続けられました。ただ単に多読に終わることなく、古事にいう「眼光紙背に徹す」で、一々「あしかな読みをされ、批判、考証を重ねての努力でした。」又、構想を記述される場合にも非常な努力をされていきます。内容は勿論、用語についても入念でした。博士の原稿は数多く現存しています。が、いずれも徹底した推敲で、実に骨身を削る努力が繰り返されて

おり、師白鳥博士も「津田の原稿は……。」と感嘆されるほどでした。かつて小泉信三氏は博士八十六才の大著「歴史学と歴史教育」が世に出た時、「世界にも稀な「学者の老健」と称賛の辞を述べられました。が、博士の著述は生涯続けられました。「著述千秋功未了」この句は博士晩年の心境を披露されたもので、ほんとうに感奮される言葉であります。



積みあげられた記念碑

## 石の原稿用紙を積む

佐 光 庸 行

昨年十一月から今年の三月にかけて約四ヶ月間、野外で記念碑の制作をした。場所は市内前平公園の近く、建設会社の資材置場を臨時の仕事場とした。石彫の仕事は埃りと騒音のため人家から距離を置く必要があり、ある建設会社の社長の好意で土地を提供してもらったのである。冬の木枯しの風が吹く日は、瘦身にはしんどいが、研鑽精神には緊張を与え、研鑽をえてくれるので、私は冬に向うのが好きである。見せきじり、石の原稿用紙は、一枚が巾八十センチ、チ奥行き六十センチ、チ厚さ二、七センチ、重さ三〇キログラムである。総重量は約三トンのことになる。これを八十八枚、博士の八十八歳の生涯にちなんで一枚々々三メートル十センチの高さに積み上げたのである。すなわち一枚が博士の一年を意味することになる。もっとも目に見える部分は、構造上七十枚、あと十八枚は地下に埋まっているわけである。また碑全体の構成は、背景の空間との関係性を配慮して、全体をねじ

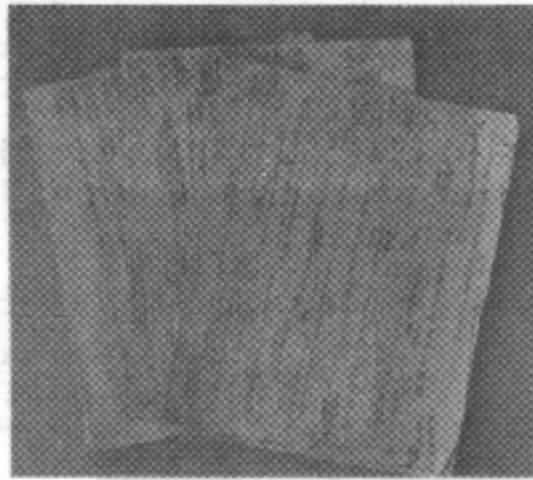
るように曲面から運動感が生まれるようにした。私はこの碑を彼の精神に倣い知を積み重ねるように石を積み上げたのである。したがって私はこの記念碑を「知の積層」と名づけた。この碑を通して、人々が津田左右吉の精神を少しでも感じることができれば、者として望外の喜びである。終りにあたって、この碑を作る機会を私に与えていただいた顕彰会の皆さんにまずお礼を申し上げます。また、この碑を作る機会を私に与えていただいた市関係者のみなさん、アートダイレクターの、今井裕夫氏、彫刻の助谷、松久、山本の諸兄にあらためて感謝の意を表します。一九八七・三、四月の発行

(注) 佐光庸行氏：武蔵野美大卒業後、イタリアの工房などで石彫技術を習得。主な作品としては、市文化会館ホワイエ彫彫、サンケミカル社供養塔などがある。二四二一年生。

昭和四十三年四月、下米田小学校勤務を命じられた辞令書を持って、私は当時の下米田小学校校長室へ入った。校長室の書棚には津田博士の著書がずらりと並び、博士ゆかりの品々が保管されていた。何年、この学校に勤務するのだろうか。よし、なんとかこの著書を読破してみようかと決心した。

# 卒論に「津田左右吉の研究」を

月、自己の不勉強にムチ打つため、京都仏教大学文学部国文科へ入学。卒業論文のテーマに、「津田左右吉の研究」を選び、担当教授高橋貞一先生の指導を得て研究に励進し



博士の原稿を兼ねた推敲

歴史的認識力  
第四章 博士の研究方法の源流  
などであり、「文学に現われたる国民思想の研究」に視点をあてたのである。今でも感謝することは、この五冊の本を入手することが困難であったとき、当時、久田見小学校長・

博士の全著作を読破すること、尾関公見先生宅訪問、早稲田大学研究室、資料室、図書館への資料集めと、四年間の夏休みを津田博士の学問究明へと全力を傾けた。主として、研究したこと。第一章 津田左右吉の生涯 津田左右吉の生いたち 津田左右吉の著作活動 第二章 津田左右吉の研究方法 「文学に現われたる国民思想の研究」の主旨、研究動機、研究の目的、研究意図、研究態度

「文学に現われたる国民思想」の時代区分  
文学作品の研究手法、論述方法  
第三章 博士の二つの異なる



博士は、史学研究への道を求めながら、その読書は史籍関係よりも文芸関係の方が量的に多い。教養蓄積が受身的な無批判的な文化受容でなく、常に個性的な吸収享受であった。比較史学的観点から、日本の歴史と文



晩年の津田夫妻

芸とを考察することの力となったのは、青年時代における東洋、西洋の学問、芸術など幅広い吸収の努力、つまり旺盛な読書欲にあったのである。私もも心したいものである。(恵那郡福岡小学校教頭)

## 顕彰会今年度の事業

- 61・4・15 理事会(1)
- 5・12 総務委員会(1)
- 6・11 広報委員会(1)
- 7・31 広報委員会(2)
- 9・20 顕彰会だより No.3
- 10・1 総務委員会(2)
- 10・3 第二回津田左右吉賞作文募集
- 10・14 理事会(2)
- 11・28 津田賞審査(応募総数722点)
- 12・4 津田賞表彰式
- 2・13 総務委員会(3)
- 3・24 記念碑除幕式